

111 学年度第一学期ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座  
「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座 (3)  
題目：チェーホフの演劇人生—人生の本質に忠実に

中国文化大学 111 学年度ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座の第三回目は本学ロシア語文学科主任の陳兆麟先生による「チェーホフの演劇人生—人生の本質に忠実に—」と題する講演であった。まず陳先生は、チェーホフ (Anton Pavlovich Chekhov) を紹介する前に簡単にロシア近代文学の有名作家、及びその作品について紹介し、それに続いてチェーホフの生涯と代表作を段階的に紹介し、主な 4 作の戯曲の内容と影響を紹介した。

### ロシア文学序章

ロシア近代文学ではプーシキン (Aleksandr Sergeyevich Pushkin) の抒情詩が基礎を築いたのち、小説が 19 世紀ロシア文学の主流となった。世界で有名な小説家であるツルゲーネフ (Ivan Sergeevich Turgenev、『獵人日記』、『父と子』)、ドストエフスキー (Fyodor Mikhailovich Dostoyevsky、『罪と罰』、『カラマーゾフの兄弟』)、そしてトルストイ (Lev Nikolayevich Tolstoy、『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』) などのリアリズム文学作家を輩出した 19 世紀はロシア文学の黄金時代であった。

20 世紀になると、ソ連政府によって文学創作の制限がますます強化されたものの、それでも優れた作品が生み出された。ロシアの作家は 5 回に渡りノーベル文学賞を受賞しており、それは詩人のブーニン (Ivan Alekseevich Bunin)、ブロツキー (Joseph Alexandrovich Brodsky) を含め、小説家のパステルナーク

(Boris Leonidovich Pasternak、『ドクトル・ジバゴ』)、ショーロホフ (Mikhail Aleksandrovich Sholokhov、『静かなるドン』)、ソルジェニーツィン (Alexander Isaevich Solzhenitsyn、『収容所群島』) であった。

陳先生は、これらの有名な作品から読み始めて、ロシアの風習やロシア人の考えを知るようになることを提案した。

### チェーホフの生涯と創作

チェーホフ (1860–1904) は 19 世紀末に登場したリアリズム批判作家であり、ユーモラスな風刺の大家であり、彼の作品は短篇小説と戯曲である。チェーホフ一家はもともと農奴だったが、祖父が努力して金を貯め、農奴の身分から脱出することに成功した。両親は生計を立てるために市内に食料品店を開いたが、それは常に厳しい経営だった。子供の頃から厳しい生活だったが、その後、父の店は倒産し、家族は借金を避けるためモスクワに逃亡した。しかし、

チェーホフは勉強を続けようとして生計を立てるために短篇小说を書いたり、寄稿したりし始め、1880年に第一作を発表した。

彼の創作は3つの段階に分けられ、初期（1879～1886）は主に短篇小说（「小さな公務員の死」「ヴァンカ」）を中心に、ユーモラスで皮肉な文章で注目を集めた。中期（1886～1892）の短篇小说（「大草原」「第六病棟」）では最早ユーモラスな物語ではなく、単純な言葉と誠実な感情を使って現実の状況を描写し、古い社会とその罪や憎しみを描いた。それとともに、当時の平凡で灰色な、下品で無益な舞台劇を改善しようとして戯曲を書き始めた。彼は、人生は本来の姿で描写されるべきだと提唱し、小説でも戯曲でもクライマックスや奇怪な筋書きは存在しなかった。晩年（1892～1904）も生活の本質に忠実な創作活動を続け、短篇小说（「農夫」「峡谷」）や戯曲（「かもめ」）を執筆した。「ワーニャ伯父さん」、「三人姉妹」、「桜の園」は彼の作品の頂点であり。美しい社会の将来像を描き、その希望は人々の生活に固定されている。

#### チェーホフの4大戯曲

チェーホフの戯曲「かもめ」、「ワーニャ伯父さん」、「三人姉妹」、「桜の園」は現代ロシアの舞台を席卷しただけではなく、間接的に世界中の演劇の発展に影響を与えた。彼が書いたのは平凡な人々の日常生活だが、日常生活の中に重要な内容を潜ませて人生の本質を明らかにしている。プロットは単純だが、深い象徴的な意味に満ちている。「かもめ」のヒロインであるニーナ（・ミハイロヴナ・ザレーチナヤ）は冷酷な人生の試練を経験した後にアーティストとしての使命を理解し、人生の挑戦を受け入れる勇気を持っている若い女優である。「ワーニャ伯父さん」は崇高な理想や人生の目標を持たない知識人の悲劇的な運命を描いたもので、主人公が精神的な危機に遭遇した後に人生の道を再考し始め、劇的な心理的内容と人生哲学が含まれている。「三人姉妹」は上流階級の家族が衰退していく昔ながらのロシアの生活を描き、主人公は未来への美しい憧れをたくさん持っていたが、様々な困難な試練を経て、遂に人生の現実気づいた。「桜の園」は桜の園の処分による地主の衰退とブルジョアジーの台頭を反映している。

チェーホフの作品は実生活に基づき、文学は「生命の本来の姿」を描写すべきであると主張している。人生は芸術の源であると信じ、現実はいよいよ鈍く暗いものでさえあるが、明るい未来への憧れを彼の作品から見る事ができる。

（ウェブリンク：<https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>）

（原文：鍾季儒 日本語文学科・助理教授、日本語翻訳：齋藤正志 日本語文学科・教授）